

「年間第30主日」2021年10月24日「一緒に祈りましょう」

皆様、
主の希望、信頼、平和のうちに、
難しい時期ですが、復活の光であるイエス・キリストはわたしたち一人一人を教会共同体として導いてくださっています。信仰はわたしたちの盾です。

10月24日は、「**年間第30主日B**」です。

最終日曜日の前の日曜日、10月24日、今日は「世界宣教の日」であり、10月は宣教の月です。ロザリオの月でもあります。

では、ミサに参加することができない方々は、一緒に心をあわせて、祈りましょう。時間がある時は、一本のろうそくをつけて、沈黙し、十字架のしるしをゆっくり行いましょう。

「聖書と典礼2021.10.24」をお持ちであれば、その流れに従って、次にあるコメントを自由にお使い下さい、少なくとも、聖書を開いて、第一朗読 エレミヤ預言書 31.7-9と、「答唱詩編」126 (125)、第二朗読 ヘブライ人への手紙 5.1-6と、マルコによる福音10章 46-52 節を読み、個人的に黙想し、神のみ言葉についての分かち合い / 共同祈願を行いましょう。

コメント アントワン神父

I- 第一朗読 エレミヤ預言書 31.7-9 について

預言者エレミヤは、エルサレムの滅亡や、神の民のほかの追放も預言しました。それは「北の国」(8節) バビロンへの捕囚の終わりも、「イスラエルの残りの者」(7節) である神の民がエルサレムまで連れ戻されることなのです。それでもエレミヤは希望を持って、解放する主の言葉、「わたし(神)は彼ら(神の民)を慰めながら導(く)」を信じ、「喜び歌るい、喜び祝え」(7節)と、「夢」のメッセージとして、神の民に述べ伝えました。

II- 「答唱詩編」126 (125) について

預言者エレミヤが伝えた「夢」は実現しました。捕囚された神の民は、巡礼の喜びの券のように「シオン」(エルサレム)に戻って、感謝してこの詩編を歌いました。「種を手に涙を流して出て行く人は」(6a) とは捕囚時代のことです。「束をかかえ、喜びにあふれて帰ってくる」(6b) とは、エルサレムに戻った時のことです。

III- 第二朗読 ヘブライ人への手紙 5.1-6 について

旧約聖書によると、神に呼ばれて選ばれた大祭司は、モーセの後継者として、神の家の者となり、神と民との仲介者となります。そして、アロンの後継者として、民の罪のために、いけにえを捧げる者なのです。「同じようにキリストも、大祭司となりました」(5節)。イエス・キリストは「メルキゼデク」であり、((詩編110.4/創世記14.17-20)わたしたちはその大祭司との係わりの始まりと終わりの時を知らないのです。) 永遠にこの大祭司との係わりを持っているのです。

IV- マルコによる福音 10章 46-52 節 について

バルティマイ(ティマイの子)と言う人物は、信仰の道を望み、メシア=キリストを探している弟子を表しています。「盲人」の状態とは、メシアを見つけられない、理解出来ない、動けない、それで不安になって、信仰の「道端に座って」いるという意味です。バルティマイは「物乞いしていた」とは、メシアを見つけるために人々に助けを願っているという意味です。信仰の道では大勢の人々がイエスと共にいました。叫びを聞いたイエスは、信仰の道端に座って、キリストが見えない「盲人」を呼んで、「何をしてほしいのか」と彼に尋ねました。バルティマイは「先生、目が見えるようになりたいのです」と答えました。これは信仰の道をキリストと共に歩むことが出来るようにと、願っているのです。そして望んだ通り、「盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った」と記されています。

また、バルティマイは、求道者「キリスト教の入信」の道を望んでいる人、また堅信志願者「イエスに従いたい人」に、似ているのでないでしょうか。

最終日曜日の前の日曜日、10月24日、今日は「世界宣教の日」であり、10月は宣教の月です。「全世界宣教の活動」のため、求道者と堅信志願者のため、皆が「宣教のことの新しい出発に招かれている」「希望の宣教者」(教皇メッセージ)となりますように祈りましょう。

(沈黙、分ち合いか/共同祈願か)

次に、祈りましょう。(ミサの集会祈願)

「慈しみ深い神よ、苦しみや悲しみの中から救いを求める声に耳を傾けて下さい。あなたにより頼む私たちが、この集いをとおして、主の導きを確かに受けとめることが出来ますように。

聖霊の交わりのなかで、あなたとともに世に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」

最後に 十字架のしるしをゆっくり行いましょう。「父である神様に感謝」。

「世界宣教の日」の関係で、PAULINE JARICOT ポリーヌ・ジャリコ 「生きているロザリオ」についての説明を読んで学びましょう。

PAULINE JARICOT ポリーヌ・ジャリコ 「生きているロザリオ」

アントワン神父

ポリーヌ・ジャリコという女性の名前を聞いたことがありますか。
1822年に、創設された「信仰の布教の事業団」と「生きているロザリオ」の創始者です。この事業団は1922年に「教皇庁福音宣教省」の一つの活動として「教皇の宣教活動の事業団」(O.P.M :Œuvres Pontificales Missionnaires)となり、毎年10月の最後から2番目の主日を「世界宣教の日」としました。

「世界宣教の日」は、「すべての人に宣教の心を呼び起こさせること、世界の福音化のために、霊的物的援助をはじめ宣教者たちの交流を各国の教会間で推進することを目的としており、この日の献金は、各国からローマ教皇庁に集められ、世界中の宣教地に送られる」という活動です。

ポリーヌ・ジャリコは1799年フランスのリヨン市に生まれ、当時のリヨンの裕福な家庭の娘として暮らしましたが、1816年の四旬節の時に回心して、貧しい人々を助け、福音を知らない人々に神のみ言葉を伝えるため、1816年12月25日(クリスマスの日)リヨンのフルヴェールの丘にある聖母マリアの小聖堂でその身を捧げました。17歳でした。

彼女の弟、フィレアスはパリ教区のサン・スルピスの神学院で神学生となり、宣教師として中国に派遣されるためにパリ外国宣教会への入会を考えましたが、1789年のフランスの革命の影響で、当時は海外宣教のための高額な旅行費が不足していました。フィレアスは姉のポリーヌに、中国もしくは全世界へ宣教活動を支えるための助けを願い出しました。

1818年、ポリーヌは、全世界での宣教活動を支持するため、「週に1スー(約2円)」を集めようという運動を勧め始めました。当時は労働者でも週にこのくらいの金額であれば献金することが出来たので、この運動はリヨンで、そしてフランスの全土で早く広まりました。ポリーヌはこのお金を管理するために1822年にリヨン教区の許可を得て、リヨン市に「信仰の布教の事業団」を創立したのです。この運動の熱意を守るため、神のみ言葉、特に福音、イエスの生涯を知らせるため、彼女は1826年に「生きているロザリオ」という分ち合う祈りの活動を考えました。

まず、ロザリオの祈りとは、主の祈り1回、アヴェ・マリアの祈り10回するとロザリオの「1連」となり、さらに5連で「一環」となります。ロザリオの55の球を繰りながら、イエス・キリストの生涯を思い起こし、神の慈しみの神秘(玄義)をマリア様と共に黙想する祈りです。当時は「喜び・苦しみ・栄え」の神秘という3環(今は、光の神秘も加わり4環)、15連の祈りがあったので、15名の祈りの団で一人ひとりが毎日15の神秘の内の1連を選んで祈り、週一回の団の集まりのときに「1スー」を宣教活動のための献金箱に入れ、次の週のロザリオの分ち合いを準備するというのが「生きているロザリオ」の趣旨です。1860年頃には、生きているロザリオの団に参加していた者は200万以上になりました。

この「生きているロザリオ」から5つの民族と5つの大陸の5色(1連1色)のロザリオの形が出来ました。

そして、「信仰の布教の事業団」は「宣教の年代記 (Les Annales de la Mission)」という当時の宣教活動（宣教師の手紙、殉教者の話、様々な国での教会のスタートの物語や献金のアピールなど）を紹介して大衆的な雑誌も配布し始めました。この雑誌のお陰で、のちに宣教活動の保護聖人となる幼子聖テレザ(小さな花のテレジア)は宣教活動について興味を持つことになりました。

その後、ポリーヌは聖ヨハネ・マリア・ヴィアネと懇意になり、宣教師たちと会い、ミサ道具、ロザリオ、十字架や聖人の御像を「宣教地」に送るなどの活動をしました。弟フィレアスは神父になって、姉を手伝うためにリヨンに来ましたが、1830年に亡くなりました。34歳でした。ポリーヌは様々な問題と苦しみを抱えましたが、最後まで熱心に「信仰の布教の事業団」と「生きているロザリオ」の活動を続け、1862年1月9日に亡くなりました。62歳でした。

1963年、ポリーヌ・ジャリコは尊者として教皇ヨハネ 23世から宣告され、2022年5月に教皇フランシスコは彼女を福者の列に加えることとなります。

「あなたがたにまで^{つた}伝えられたこの^{ふくいん}福音は、^{せかいじゅういた}世界中至るところでそうであるように、あなたがたのところでも、^{かみめぐ}神の恵みを聞いて^{しん}真に^{さと}悟った日^ひから、^み実を^{むす}結んで^{せいちよう}成長しています。」（コロサイ1・6）

